

# Glocal Tenri



4

月刊 **グローバル天理** Monthly Bulletin Vol.15 No.4 April 2014

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- 巻頭言  
五輪を平和の祭典に  
／深谷忠一 ..... 1
- 天理教教理史断章 (79)  
家城文書⑧  
／安井幹夫 ..... 2
- 天理教伝道史の諸相 (28)  
海外伝道概要  
／早田一郎 ..... 3
- 「おふでさき」の有機的展開 (24)  
第三号：第百三十三首～第百四十九首  
／深谷耕治 ..... 4
- 新宗教のブラジル伝道 (12)  
キリスト教の変容⑨  
／山田政信 ..... 5
- 「いのち」をつなぐ—生死の現象 (28)  
授かる「いのち」③  
／堀内みどり ..... 6
- 「襲のあわいに深く入り込んでいて…」  
をめぐって (14)  
襲のあわい—その火口⑭  
／松田健三郎 ..... 7
- ノーマライゼーションへの道程 (26)  
福祉のまちづくり⑬  
／八木三郎 ..... 8
- ヴァチカン便り (7)  
家族問題はシノド待ち  
／山口英雄 ..... 9
- English Summary ..... 10
- おやさと研究所ニュース ..... 11  
第2回「教学と現代10」(ヨーロッパの宗教事情と天理教の伝道) 報告 (辻信一郎・天理教海外部翻訳課員) 法王交代後のヨーロッパと「世界宗教者平和の祈りの集い」  
／第268回研究報告会：「清末提督学政赴任記考(その1) 嚴修『蟬香館使黔日記』を通して」／初の「出前教学講座」を沖縄教区で開催(佐藤孝則)／「開講20周年記念・公開教学講座」のお知らせ

## 巻頭言

### 五輪を平和の祭典に

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

1968年の夏、アメリカ西海岸の大学を卒業。アルバイトで得た千ドルを手に、東回りでの帰日の途に。ヨーロッパ各地を訪問後、9月半ばにモスクワに入りました。

せっかくの芸術の都。“どこかの劇場で…”と思って案内所で尋ねましたが、週末のこととて何処も満席。ところが、そこに一人の上品な婦人が現れて、バレエ公演の入場券を譲ってくれました。そして、クレムリン内の大劇場。となりに座った男性が、この次第を説明してくれました。「この国の観光業の振興を旨として、英語を話せる人材育成についての会議がこの週末に開かれ、各地方の英語教育の責任者が召集された。君が出会った婦人は北のレニングラード、私は南のリゾート地ソチの出身。彼女は今日中に地元に戻るかどうか迷っていたので、君にチケットを譲ったのだろう」とのこと。

“英語が通じるソ連のインテリと話ができる千載一遇のチャンス”とは思ったものの、時は「プラハの春」(ソ連のチェコへの軍事介入)の直後。政治向きの話はマズイ(?)と、最初は文学や文化交流の話題を小出しに…。しかし、次第にそれでは納まらなくなりました。「何故、ソ連は戦車でチェコ人の自由を奪うのだ?」

「君の言う自由とは、プチブルだけのもの。庶民は我が軍の進駐を歓迎している!」  
「日・ソとも近代化と同じ40年間。無血で成し遂げた日本に比べて、ソ連は血に塗れているじゃないか!」

「それは事実だが、ちっぽけで均一な日本と違ってソ連は広大な多民族国家。あの程度で治まったことの方が凄いことなのだ!」

公演の幕間、終焉後も、バレエ観賞はそちらのけで議論。ホテルに帰ってからロビーで深夜まで。また翌日も、彼がソチに出発する直前まで延々と議論。最後には、「20年後を見ている。どちらの体制が正しいか証明されるだろう」とお互いに言い合って、名前や住所を交換する間もなく別れました。それから21年後、ベルリンの壁の崩壊に

端を發したソ連邦の解体。「あの時の彼は今どうしてるかなあ」と懐かしく思い出しました。

そして、46年目に彼の町・ソチで開かれた冬季オリンピック。テレビの華やかな映像を見て、“英語を話す人材育成をした彼の努力が報われたのかなあ”と思いつつ。「レストランに入ったら、席に着けるまで20分、メニューをもって来るまで30分、料理が出るまで30分」と話したら、「それはまだましだ。俺なんかこの間2時間かかったよ…」「政府の役人と一緒に、チップの多い団体さんでないと相手にされないのさ…」などと、一人旅仲間の皆が口々に言っていた“ロシア流のおもてなし”も、今は少しは変わったのだろうかという感慨も…。

しかるに、一方、五輪史上最大(最悪)といわれたロンドン五輪の警備1万7千人を遙かに超える、“精鋭7万の軍隊がテロと向き合ったソチ五輪。会場上空には無人哨戒機、地上には対空ミサイルや移動式防空システム、海上には対破壊工作艇や巡洋艦、水中では特殊潜水具をつけた兵士が隠密行動、街に入れば数メートルおきに監視カメラ”などとの報道に接すると、“46年たってもソ連はソ連、チェコがウクライナやチェチェンに変わっただけなのでは?”という思いにもなります。

そこで、筆者が願うのは、日本でのオリンピックを、“自国のメダル獲得の多さより、警備の少なさを誇る大会にする”ということです。“平和の祭典を強大な軍事力で警備”という矛盾の解消こそを、東京大会開催の最大の目標・意義にできないかと思うのです。

それには、先ず、日本人が争いの芽を摘み、「感謝・慎み・たすけあい」を実践して、平和・繁栄のモデル国を作る。そして、自国のみならず、万国の繁栄のために貢献をする。“日本に学べば、争わずとも幸福になれる”と、世界中の誰もが思うようになれば、テロなどを恐れる必要はなくなるでしょう。

2020年の東京オリンピックが、“真の平和の祭典になった大会”として、歴史に記されることを切に願っている次第です。